

協働型評価における評価者の在り方を再考するー評価のプロセス活用に焦点を当ててー

研究員 清水潤子、津崎たから、中谷美南子、
今田克司、千葉直紀

多様な主体による連携や協働の重要性が増すなかで、このような取り組みの評価にあたっては、利害関係者のエンゲージメントを伴う協働型評価の実践例や研究が蓄積されてきている。協働型評価では、事業の内部・外部の評価者と評価情報を必要とする主体が協働し、関係者間の協働関係から創出される価値が重視される。そして、評価結果が単に活用されるだけでなく、評価プロセスにおける関係者間の相互作用が評価主体の学びや能力の向上に寄与し、評価プロセス自体が事業活動やプログラムの成果を高める「評価のプロセス活用(process use)」という概念が提唱されてきた。しかしこのような特徴は、学習理論や認知科学、組織論等の知見や、社会的構築主義的な視点からは理論的にも支持される一方で、「評価者」がどの程度主体的に関与すべきかについては、理論的にも実践的にも議論が分かれており、現場における混乱の一因ともなっている。

こうした問題意識のもと、本研究では評価のプロセス活用や関連する概念についての国内外の研究動向を踏まえながら、評価研究者・実践者との対話を通じて知見の整理

と深化を試みた。その一環として、2025 年 12 月 15 日には、カナダ・オタワ大学名誉教授であり協働型評価研究の第一人者である Bradley J. Cousins 氏を招聘し、ラウンドテーブル・ディスカッションを開催した。本会には、ソーシャルワーク、非営利組織、教育、司法、国際開発など多様な分野で評価に携わる研究者・実践者が参加し、協働型評価者の位置づけや求められるコンピテンシー、評価能力開発やプロセス活用への関与などについて活発な議論が交わされた。

本ラウンドテーブル・ディスカッションの成果として、協働型評価者の位置づけは実践文脈に応じて調整される動的なものとして理解する必要があることや、評価プロセスへの関与を通じて生じる学習や認識変容は、評価の副次的効果ではなく、協働型評価の中心的な成果としても位置づけ得る可能性が示唆された。不確実性が高く、変化が速い現代において、協働型評価の可能性と有効性を改めて感じる機会となった。



(ラウンドテーブル・ディスカッションの様子)